

シンポジウム「文化財をまもる」

日本における 西洋画の保存修復

開催趣旨

本シンポジウムは、

日本における「西洋画」の材料や技法の変遷を確かめ、

またその保存と修復の実際と問題点を検証し、

知見を交換することを目的としています。

特に、第二次大戦後の油彩画保存修復を担ってきた世代と

それに続く世代の修復技術者の相互協力と継承を

確認しあう場となることを期待しています。

そして、美術館・博物館関係者はもとより

一般の美術に関心のある方々にも、

西洋画の保存修復への理解を

深めていただくよい機会となることでしょう。

平成 24 年 10 月 13 日 (土)

一橋大学一橋講堂

〒101-8439 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 学術総合センター 2F
TEL : 03-4212-3900

主催 一般社団法人文化財保存修復学会

後援 文化庁

独立行政法人国立文化財機構

独立行政法人国立美術館

日本文化財科学会

読売新聞社

総合司会: 日高真吾 (国立民族学博物館)

10:00～10:20 開会挨拶

三浦定俊 (文化財保存修復学会会長)

10:20～11:00 特別講演

西洋壁画の保存修復

青柳正規 (国立西洋美術館長)

11:00～11:40 基調講演

近代日本の油彩画技術

歌田真介 (東京藝術大学)

11:40～13:00 昼食・休憩

13:00～13:30 日本の「西洋画」修復

山領まり (山領絵画修復工房)

13:30～14:00 保存修復の教育とその問題点

木島隆康 (東京藝術大学)

14:00～14:30 美術館における保存修復

伊藤由美 (神奈川県立近代美術館)

14:30～15:00 「現代美術」の保存修復

相澤邦彦 (兵庫県立美術館)

15:00～15:15 休憩

15:15～16:45 パネルディスカッション
西洋画の保存修復を考える

コーディネーター

村上 隆 (京都国立博物館)

パネリスト

森田恒之 (国立民族学博物館)、山領まり (山領絵画修復工房)

木島隆康 (東京藝術大学)、伊藤由美 (神奈川県立近代美術館)

相澤邦彦 (兵庫県立美術館)

16:45～ 閉会挨拶

特別講演

西洋壁画の保存修復

国立西洋美術館長 青柳正規



青柳 正規 (あおやぎ まさのり)

ギリシア・ローマ考古学者

1944年 大連生まれ。

1967年 東京大学文学部美術史学科卒業。

1969～1972年 ローマ大学に留学。古代ローマ美術史・考古学を学ぶ。文学博士。

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、同研究科長、文学部長、同副学長を経て、現在、国立西洋美術館長。東京大学名誉教授。日本学士院会員。

2006年 紫綬褒章。

2011年 NHK放送文化賞受賞。

ポンペイ「エウローパの舟の家」(1974-78)、シチリアのレアルモンテのローマ時代別荘 (1980-86)、タルクイニア近郊のローマ時代の別荘 (1992-2003)、ソンマ・ヴェスヴィアーナの所謂「アウグストゥスの別荘」(2002-) の発掘にあたる。

著作に、『エウローパの舟の家』(地中海学会賞)、『古代都市ローマ』(マルコ・ポーロ賞、浜田青陵賞)、『皇帝たちの都ローマ』(毎日出版文化賞)、『トリマルキオの饗宴』(小学館) など。

基調講演

近代日本の油彩画技術

東京藝術大学 歌田真介



我が国の洋画史を仮に四期に分けて考える。今回のテーマは第三、四期である。

第一期 (初期洋風画) 桃山時代キリスト教の伝来とともに油絵その他の洋画技術が入った。その後の禁教によって十分な定着は無かった。

第二期 (洋風画) 8代將軍吉宗は享保5年 (1720年) キリスト教関係以外の書籍の輸入を許可。これによって蘭学が起こり洋画研究が再開された。平賀源内、小田野直武、佐竹曙山、司馬江漢、亜欧堂田善など。

第三期 (幕末から明治中期まで) 19世紀半ばに幕府は洋学の研究機関を作り、画学局を置いて洋画の研究を始めた。明治維新後は画塾が研究を引き継いだ。明治9年工部大学校の中に美術学校を置き本格的洋画教育が始まったが、10年代の復古的風潮の中で廃校になった (同16年)。この頃から文部省は伝統美術復興を目指して美術学校の準備を始めた。同22年開校の東京美術学校である。洋画家の運動にもかかわらず西洋画科は設置されなかった。洋画家たちは明治美術会を作って対抗した。この時期の洋画は少ない情報の中で印象派以前の伝統的方法を研究した。褐色調の絵が多い。高橋由一、浅井忠、原田直次郎など。後に脂派、旧派などと蔑称された。

第四期 (明治後半以降) 明治29年に美校に西洋画科が新設され黒田清輝が指導者になった。個性の尊重など近代的視点を取り込んだ。一方、芸術は表現であり、職人的技術は有害であるかのような誤解を学生たちに与えてしまった。その弊害は現代まで続いている。

油絵具と溶き油について

油絵具は顔料をリンシード、ポピーなどの乾性油を主成分とした媒材で練ったものである。乾性油が酸化重合して固化する。描画にあたって用いるのが溶き油である。溶き油は3種ある。

- (1) 乾性油。リンシード、ポピーなど。
- (2) 樹脂油 (ワニス)。マスタックワニス、ダンマルワニスなど。
- (3) 揮発性油 (スピリット)。テレピン、ペトロロールなど。

この3種を組み合わせて用いると堅牢で緻密な油絵になる。しかし、油絵具は粘りが強い、溶き油も粘りが強い。それを嫌って、大正時代以降揮発性油のみで描く画家が多くなった。このため脆弱で壊れやすい作品が増加している。

明治前期の油絵は堅牢で日本の風土に適応している。岸田劉生と草土社の画家の絵も堅牢であり油絵本来の絵肌を持っている。文献からこの人たちは樹脂油を使っていたらしいことが分かってきた。

日本の「西洋画」修復

山領絵画修復工房 山領まり



絵の修復は細部をゆるがせにできない仕事だが、今日のテーマは大きいので、まず大づかみの話を、しかし自分で見聞きしたことから離れずに進めたい。

「西洋画」修得を志した高橋由一の蕃書調所画学局入りは1862年、今から150年前のことだが、それから100年下った1960年代には、「西洋画」はもうすっかり日本文化の土壌に根を下ろしていたように見えた。「洋画展」には観客が溢れ、画家志望の青年たちが増え、東京では1952年のブリヂストン美術館と国立近代美術館に続いて、59年に西洋美術館が新設されていた。だが「西洋画」の保存修復への関心はまだ低かった。

1955年に国立近代美術館で開催された明治初期洋画展を観た米国の絵画修復家ウィーラーは「展示作品の三分の二以上が直ちに修理を要する」と診断し、油彩画保存への「一般的無関心」と「熟達した専門家の不在」を厳しく指摘している。当時すでに画家山下新太郎の子息の山下登、画家出身で野間仁根・伊藤廉らの友人竹内健蔵らが修復を専門に活動していたが孤立していた。美術館にも十分な情報はなかったであろう。

大学の中にも、油彩画の保存・修復への関心が育ちつつあった。東京藝術大学油画科では寺田春一助教授が大戦中の美術学校時代に安井曾太郎教授に勧められた材料・技法の研究を戦後も続け、1953年末から55年初頭にかけて英・仏・伊・ベルギーの研究状況を調査した後、研究室を開設し若い希望者を受け入れて訓練した。そこに集まる情報や調査・修復依頼は、参加者にとっての基礎経験として将来に生かされることになる。

1962年夏、パリの国立近代美術館で日本の石橋コレクションの名品が展示された折、アンドレ・マルロー文化担当相が画面の「くもり」の洗浄を提案したのが機縁で、フランスの修復家ジャック・マレシャルが招かれ、西洋美術館の「松方コレクション」の洗浄など修復の実際を関係者に公開した。通訳兼助手をつとめた西洋美術館の黒江光彦は、やがて渡欧して修復を学び、69年には著書『よみがえる名画のために』を刊行する。

1970年、占領軍が接収した大量の「戦争記録画」が「永久貸与」の形で米国から返還された。「西洋画」は121点、大型で損傷著しい作品群の修復のために、東京国立近代美術館は修復家を動員した。黒江光彦は公務員在籍で不参加だったが岡村孝三郎、杉浦勉、小谷野匡子、森田恒之（以上4人は欧米留学組）歌田真介、吉村絵美留、山領まり、の名と修復報告が残されている。6年がかりの大仕事で、皆鍛えられた。

この1970年ころが、日本の「西洋画」修復が歩き出す起点になった、というのが私の仮説である。それからの40余年については、仕事台の映像を見ながらお話ししたい。



神宮外苑聖徳記念絵画館において修復作品の取り外し

保存修復の教育とその問題点

東京藝術大学 木島隆康



東京藝術大学の保存修復油画研究室の概要

私の研究室の修士課程に毎年油画修復家を希望して10名前後の若者が受験してくる。そのうちの3名ほどを選抜している。ほとんどの学生は修復経験をまったく持たず、入学してはじめて修復作品に触る者ばかりである。指導に用いる修復作品は大学美術館が所蔵する傷んだ作品の中から適宜選択することができ、恵まれた環境にある。

授業のカリキュラムと研究活動は本研究室の教育方針を具体的に反映していると思いい主なものを紹介する。

修復実習は、修士1年時に明治期の自画像作品を担当させ、修士2年ではやはり大学美術館が所蔵する明治期から昭和初期に提出された卒業制作品（修復を必要とする作品）を担当させて修復技術の向上をはかっている。さらに、修復実習では近年行われなくなった油画作品に施す様々な裏打ち方法についても技術者の減少とともにその技術も失われつつあるため、実習として可能な限り体験させている。また、絵画の構造と材料の理解を深めるために油画カンバスの制作も行い、さらに古典絵画技法の理解にイタリア初期ルネサンス期の金地テンペラ画の模写制作を一年かけて行うなど、修復技術者に必要と思われる技法材料に対する経験を重要視している。また、修復に用いる修復材料の専門的な材料学や、美術館博物館の文化財保存環境についても東京文化財研究所の協力のもと講義がおこなわれている。

以上、カリキュラムを中心に説明してきたが、本研究室においては、学外活動も重視して、赤坂迎賓館の天井絵画の調査、東京国立博物館と共同で油画作品の調査、さらに、東京都現代美術館所蔵作品の調査も毎年実施している。加えて、研究活動として、科学研究費や学外から依頼される受託研究も教育活動の一環として積極的に応募し実施している。昨年の東日本大震災では被災作品を受け入れ、ボランティアを募って対応している。

また、本研究室は海外からの客員研究員も受け入れている。優れた研究員の存在感は学生に大きな刺激となり本研究室の活性化に貢献して重要である。

課題

修士課程2年間に博士課程3年間を加えたとしても、大学院で学ぶ修復技術修得には限界がある。大学は専門分野の入口であって、職を得て後、職場で研究や多くの損傷作品を体験してスキルを磨く以外にないであろうし、修復分野では学部に専門コースを持たないわが国では基礎力の不足は大きな課題である。大学では、学生は日々の研究や私生活において様々な悩みも抱きながら学生生活を送っている。学生からの相談も多い。小さな相談も出来るかぎり大切にしていかなければならない。

美術館における保存修復

神奈川県立近代美術館 伊藤由美



油彩画の修復を始めるとき、修復家はまず作品の状態をしっかりと見極め、処置内容、材料、方法を考える。同時にその作品の所蔵先や将来どこに保管され、どのような場所に展示あるいは飾られるのかを知ろうとする。それによって処置内容や材料が変わることがある。作品を大事に見つめるとき、修復はでき得ればその作品が辿ってきた歴史と、これから置かれる環境また作品の‘生き方’に寄り添ってゆくべきであろう。それを思うとき、美術館での修復はこの考え方を実践しやすい場であると考えられる。しかし、そのためには美術館に保存修復に携わる人が常にいることも必要である。美術館において作品を収集、収蔵する意味と、保存に対する考え方の関わりは切り離すことはできない。

修復工房においては、依頼者は美術館、画廊、個人、公共施設など様々であり、返却後に作品が置かれる環境も様々である。美術館と個人宅ではその環境は大きく異なるであろうし、画廊であれば売却後のことは全く想像がつかない。また、委託された時点で、ある程度の年月に亘って、作品全体の良好な状態を保障できるものでなければならず、処置内容も必然的に多くなる場合もある。その点、美術館における修復は、技術的に大きく変わるものではないが、作品のあり方に対する考え方により、修復処置を限定することができる。美術館においては、特定の意味を持って作品が収集、展示され、それをできるだけ忠実に後世に伝えることが役目である。作品が展示、鑑賞、移動などに堪える状態であることは条件であるが、それが充たされていれば、損傷に対しては必要最低限の処置で十分ということになる。たとえば、浮き上がりや剥落は早めに見つけ処置をし、画布のゆるみがあれば早めに張り直すといったように損傷が広がる前に処置をするなど、常に基礎的なことに注意を払うという、いわゆる初期判断、初期治療が重要な仕事となる。そして、大掛かりな修復による作品への負担をできるだけなくすことである。一方、現在では多くの美術館が保存環境への意識を高め、展示、収蔵環境の水準は保たれ、美術館所蔵の作品は自館でも貸し出し先でも様々な点で保護、管理されている。保存に適した材料、方法も利用できるようになってきた。それらの事情を踏まえて、作品の処置内容を考えるのが美術館の保存修復のあり方であろう。つまり美術館における保存修復とは、「修復」とともに、修復をしないで済むための「予防処置」である。

「現代美術」の保存修復

兵庫県立美術館 相澤邦彦



20世紀初頭を契機として、特にその半ば以降様々な絵画様式があらわれ、伝統的な絵画では用いられなかった素材、また人工的な新しい素材が広く用いられるようになったといえる。欧米ではじまったこの変化は世界中に広がり、伝統を乗り越えようとする動きでありながら、各地域の伝統的な美術様式を取り込みつつ「現代美術」として定着していったといえるだろう。

このような現代美術作品に用いられる新素材は、その新しさのために将来的な状態変化を予測しきれない側面がある。さらに伝統的な美術品には使われなかった特殊な素材も複雑に取り入れられることで、構造への負荷や化学変化が起こっている場合もあり、それらにどう対応するかは現代美術作品の保存修復における固有の課題だと考える。

そこでまず、様々な素材の情報をできるだけ広く深く集めることが対応の前提となるだろう。これと同時に、「絵画」の形態を取りつつもより立体的な構造をもつことが多いため、構造力学的知識も必要となる。さらに、その作品の美術品としての審美性、個性、コンセプトを鋭く「見る」ことが不可欠と思われる。仮にこれを見誤ったまま処置を行うと、作品のあり方が変わる恐れすらある。この点は、近代や近代以前の作品以上に現代美術作品において顕著なことと考える。

現代美術作品の保存修復に際しては、その形態や構成要素が非常に幅広く膨大なことから、広く他分野の専門家と横断的に取り組むことが必要と思われる。もちろん文化財の保存修復全般において連携や交流、情報交換はいうまでもなく重要なことだが、現代美術作品の保存修復に際しては、その多様性から特にそれが求められるといえるだろう。ただし、様々な専門分野の知見を結集しても解決策が見つからない場合は、作品への直接的な作業は一旦見合わせ、有効な手段を広く探しながら新しい技術や知見を前向きに待つという姿勢も必要かもしれない。

脈々と続く美術の歴史を背景に、この瞬間も現代美術作品は生み出されており、今後おそらく更に変化しながら生み出されていくのだろう。美術館の所蔵するものなど既に評価が定まっている作品も少なくなく、公共性を持つ文化財として、「新しいもの」から「古いもの」になっていく現代美術作品をどう保存し、どう修復していくかという避けられない課題に、私たちは今向き合っているといえるだろう。



白髪一雄 「黒暗天女」
1984年、油彩・キャンバス、
194.0×259.0cm、兵庫県立美術館蔵

パネルディスカッション

西洋画の保存修復を考える

コーディネーター 京都国立博物館 村上 隆

パネリスト 国立民族学博物館 森田恒之

山領まり、木島隆康、伊藤由美、相澤邦彦



村上 隆 (むらかみ りゅう)

京都国立博物館学芸部部長

1953年、京都生まれ。京都大学工学部、同大学院工学研究科修了。東京藝術大学大学院美術研究科修了。学術博士。奈良文化財研究所上席研究員を経て2008年から京都国立博物館勤務。高岡市美術館館長。石見銀山資料館名誉館長。専門は、文化資源科学、歴史材料科学、博物館学。著書に、『金・銀・銅の日本史』(岩波新書)、『金工技術』(至文堂)、『美を伝える』(監修、京都新聞出版センター)、『色彩から歴史を読む』(ダイヤモンド社)、『文化財は守れるのか』(編、クパプロ)ほか。第8回ロレアル国際賞「色の科学と芸術賞金賞」、第1回「石見銀山文化賞」、第4回「文化財保存修復学会業績賞」ほか。文化財保存修復学会理事。日本文化財科学会評議員。岡山大学客員教授ほか。



歌田 真介 (うただ しんすけ)

東京藝術大学

1934年生まれ。

1959年 東京芸術大学美術学部油画科卒業。

1972年 創形美術学校修復研究室室長に就任。

1979～1995年 同修復研究所と改称、所長に就任。

1995年 東京芸術大学文化財保存学保存修復(油画)研究室教授。

1998～2002年 同大学美術館館長を兼任。

2012年 文化財保存修復学会第6回学会賞受賞。

現在、東京芸術大学名誉教授。東京国留博物館客員研究員。

明治美術学会理事。広島市立大学講師(非)、愛知県立芸術大学講師(非)。

著書に『油絵を解剖する』(NHKブックス)、『高橋油一油画の研究』(中央公論美術出版)。

共著に『明治前期油画基礎資料集成』(同)、『明治後期基礎資料集成』(同)。

山領 まり (やまりよう まり)

山領絵画修復工房

1958年 東京芸術大学美術学部油画科卒業。

1960年 同大学専攻科修了。

1970年 同大学油画技法材料研究室助手・助手を経て、修復家として独立。工房を設立して油彩画、版画素描の修復に携わり今日に至る。東北芸術工科大学、東京芸術大学などの講師を歴任。

1992年 小山敬三美術振興財団の研究奨励を受けて研究誌『絵画修復報告』を創刊。

2010年 第4回「読売あをによし賞」受賞、同年文化財保存修復学会賞受賞。



森田 恒之 (もりた つねゆき)

国立民族学博物館名誉教授、愛知県立芸術大学客員教授

1961年東京芸術大学美術学部芸術学科卒業、63年同学美術専攻科(保存修復技術専攻)修了。万国博美術館、埼玉県立博物館、東京都美術館を経て、79年より国立民族学博物館、2002年同定年退職後、国際協力機構専門員を経て08年より愛知県立芸術大学客員教授。

専門は、保存環境。最近では現代美術の保存技術開発に関心がある。

木島 隆康 (きじま たかやす)

東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復(油画)教授

1980～2001年 高澤学園創形美術学校修復研究所。

2001～2002年 有限会社修復研究所21。

2002～2005年7月 東京芸術大学助教授。

2005年8月より現職。

専門は保存修復、主に油彩画。その他絵画技法材料に興味を持つ。特に金地テンペラ画。

2009年 文化財保存修復学会業績賞。

主な著書・編著書に、木島隆康・林洋子『藤田嗣治の絵画技法に迫る一修復現場からの報告』(東京芸術大学出版会、2010年)がある。

伊藤 由美 (いとう ゆみ)

神奈川県立近代美術館専門研究員(保存修復担当)

1980年パリ国立高等美術学校造形科絵画専攻卒業。

1981～2003年 創形美術学校修復研究所(現 修復研究所21)。

2003年より神奈川県立近代美術館 現在に至る。

1989～1991年 パリ国立近代美術館修復アトリエ研究員。

2000年 パリ国際大学都市日本館藤田嗣治壁画修復プロジェクト参加。

東京芸術大学保存修復油画研究室非常勤講師、東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科非常勤講師、などに携わる。

相澤 邦彦 (あいざわ くにひこ)

兵庫県立美術館

2000年 成蹊大学文学部文化学科卒業。

1998年 美術修復研究所研究員、2002年森美術館コンサヴァターを経て、2012年より現職。

近現代美術作品(主に油彩画)の保存修復、美術館における予防保存活動に携わる。

共著に日本博物館協会編『博物館資料取扱いガイドブック 文化財、美術品等梱包・輸送の手引き』(ぎょうせい、2012年)がある。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいえるべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

(「入会のしおり」より)

◎文化財保存修復学会の連絡先

〒110-0008 東京都台東区池之端4-14-8
ビューハイツ池之端102号室
NPO法人文化財保存支援機構気付
Tel : 03-6661-2982 Fax : 03-6661-2983
E-mail : jsccp@sepia.ocn.ne.jp

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会
委員長 ●三浦定俊
副委員長 ●村上 隆
委員 ●伊藤由美・岡 泰央・谷口耕生
日高真吾・山領まり

<問い合わせ先>

(株)クバプロ
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15
UEDAビル6F
Tel : 03-3238-1689 Fax : 03-3238-1837
E-mail : symposium@kuba.jp

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復⑭

災害から文化財をまもる

一般社団法人 文化財保存修復学会編 / B5版変型 / 116頁
ISBN978-4-87805-122-7 C1070 / 定価: 本体価格1,200円 + 税
平成24年6月5日初版発行

※本書は平成23年12月に開催されたシンポジウム「大規模自然災害における文化財レスキュー 阪神・淡路から東日本大震災」の講演収録集です。

●基調講演

阪神・淡路大震災から東日本大震災

九州国立博物館長 三輪 嘉六

3.11大震災と宮城資料ネットの被災資料レスキュー
—活動からみえてきたこと—

東北大学災害科学国際研究所助教、

NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局長 佐藤 大介

●活動報告

1995年、阪神・淡路大震災での

文化財救出作業について

京都造形芸術大学芸術学部教授・災害対策調査部会理事

内田 俊秀

新潟県中越地震における活動の課題

—救援の要請と被災資料の修理—

九州国立博物館学芸部博物館科学課長 本田 光子

能登半島地震における文化財復興支援活動

—被災資料の調査・修復から復興へ—

金沢学院大学文学部歴史文化学科准教授 中村 晋也

東日本大震災における文化財レスキューについて

—民俗資料を中心に—

国立民族学博物館文化資源研究センター准教授 日高 真吾

●パネルディスカッション

文化財レスキュー

—16年の歩みと今後—

コーディネーター 九州国立博物館副館長 森田 稔

文化財の保存と修復⑬

みんぞく資料をまもる

一般社団法人 文化財保存修復学会編 / B5版変型 / 90頁
ISBN 978-4-87805-117-3 C1070 / 定価: 本体価格1,200円 + 税
平成23年6月2日初版発行

※本書は平成22年9月に開催されたシンポジウム「文化財をまもる みんぞく資料をまもる」の講演収録集です。

基調講演 みんぞく資料をまもる

九州国立博物館長 三輪 嘉六

国立民族学博物館における資料管理の事例

国立民族学博物館における資料管理の30年

国立民族学博物館名誉教授 森田 恒之

国立民族学博物館における資料管理の現状と今後の展望

国立民族学博物館文化資源研究センター教授 園田 直子

地域博物館とみんぞく資料

枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館の活動事例

枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館学芸員 武知 邦博

地域が守るみんぞく資料

京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科教授 伊達 仁美

災害と民俗文化財

京都造形芸術大学芸術学部教授 内田 俊秀